

それは突然訪れた

海軍(舞鶴海兵団)設営隊の兵士が相馬小学校(当時は国民学校)にやって来た。現在の相馬公民館へ来て「ここに飛行場を作るために来た。部隊の宿舎にするから校舎を空けてくれ」と校長に迫った。当時の相馬村助役永井伝松さんは「極秘事項のためか村長に伝えてあったかもしれないが役場へは全然案内などなかった」と後口話している。

始まった飛行場建設

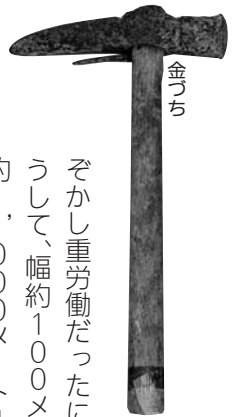
飛行場の建設仕事にあたったのは小松海軍航空隊に配属された海軍飛行予科練習生(以下、予科練生。※1)と設営隊の兵士を合わせた約400人。それに朝鮮出身の労働者約200人を含めた、総勢約600人ももちろん、地元住民や周辺地域の人たちも動員された。

予科練生と兵士は、急ごしらえの兵舎、付近の寺や民家に分かれて泊まり、朝鮮人労働者は民家の納屋や蔵を借りて泊まった。

田んぼに盛り土をするために、山からの土砂が平地までトロッコで運ばれた。当時は機械どころか一輪車さえもなく、トロッコを押し、スコップとクワを使っての肉体労働。しかも梅雨時期や真夏の炎天下で

幻の相馬飛行場

ときは昭和20年6月10日。「ここに飛行場を作るために来た」兵士から突然告げられたひと言。飛行場が建設されるという話は、住民にとってまさに「寝耳に水」の出来事だった。



の作業だったので、さ

ぞかし重労働だったに違いない。そうして、幅約100メートル、長さ約1,000メートルの滑走路の基礎部分が出来上がった。

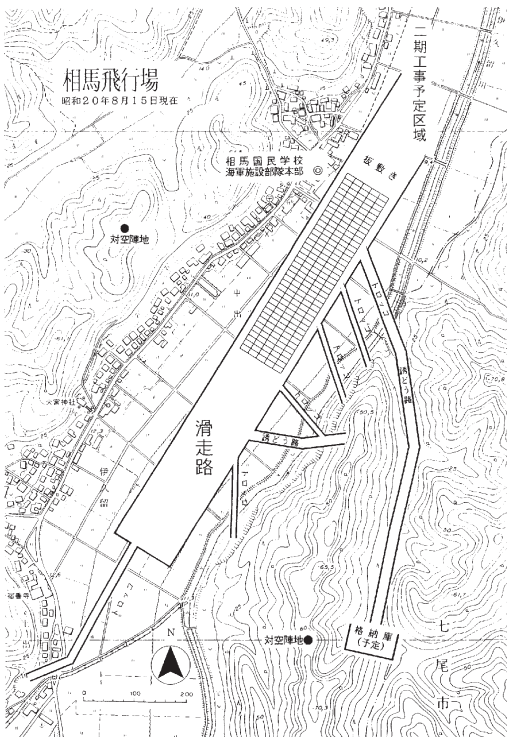
続いて滑走路本体の工事に入る。作業は主に予科練生や兵士が行い、厚板を敷き並べて滑走路が作られた。今では考えられないが、軍用飛行機の滑走路であったにもかかわらず、

当時はセメントがなく、コンクリートの代わりに木が使われていた。出来上がった滑走路(板敷き部分)は幅約50メートル、長さ約700

メートルであった。板の表面にはコルタルやペンキで黒

滑走路に使われていた厚板(※2)

厚さ6.6センチ、幅18センチ～30センチ、長さ3.6メートル。材質は杉や松が主だった。



資料をもとに作成された、当時の全体図

なぜこの地に飛行場?

赤・緑二色の迷彩が施された。滑走路建設と並行して、資材の収納などのために大小の横穴が山腹に掘られた。これらの作業は主に朝鮮人労働者が行った。山の上には「対空射撃陣地」が作られ、機関砲や高射砲が配備されていた。

そもそも、なぜこの地に飛行場が建設されたのか。

太平洋戦争末期、制空権を失った日本軍は、敵の空襲に備え、空軍基地や海軍基地を日本海側へ分散、再編していた。

昭和20年6月1日には、穴水町中居に海軍潜水学校七尾分校が開設され、訓練用の潜水艦十数隻が配備



特集 「平和への誓い」

された。その中には当時世界最大しかも世界初ともいわれた、艦内に特殊爆撃機3機を搭載した潜水艦もあったということからも、七尾湾が戦略上重要な地域だったこともうなずける。

実際、その年(昭和20年)にはB29



荷車の車輪

爆撃機が何度となく七尾湾封鎖のため飛来し、機雷事故で多くの尊い命が犠牲となったとの記録も残っている。

このような状況の中で、既設飛行場を補佐するための「牧場」と称した秘匿飛行場が本土各地に合計55カ所建設された。資料によれば相馬飛行場は「田鶴牧場」と記され、「飛行場」の名前はなかった。

この地に飛行場が建設されたのは小松基地と七尾湾を守るのに適した位置にあり、かつ建設に必要な条

件として、①平地部がまっすぐ細長く、上空の敵機からも見えにくい、②山が近く、滑走路建設のための土砂が得やすい、③谷から平野に向かう気流が安定しているなどの条件がそろっていたと考えられている。

一度も使われず、終戦

滑走路建設工事は急ピッチで進められ、昭和20年8月15日に第一期工事は予定どおり完成。午後が一番機が着陸する予定だった。ところがちょうどその日の正午に終戦。まさかの敗戦で、そのショックの大きさは計り知れない。

予科練生は間もなく小松の原隊へ向けて退去、兵士も9月24日に解散となった。朝鮮労働者はその場解散となり、元住んでいた地へ帰る人周辺地域に住み着いた人、祖国へ帰った人もいた。こうして約1年ほどほとんどの人たちは相馬地区からいなくなつた。

一方、地元では直ちに水田の復旧作業が行われ、大量の土砂は、相馬



布製のバケツ

小学校の新しい運動場(現在の相馬公民館裏グラウンド)の造成や農道の拡張などに使われた。住民一丸となった懸命の作業により、翌21年3月には全ての作業が完了。飛行場の面影は消え去り、何事もなかったかのような穏やかな田園風景に戻った。

地元住民の思い

こうした事実を人々は皆、戦争に勝つためには当然のこととして受け止めていた。身近に飛行場ができることにより、いつ自分たちが標的になるかもわからない中で、誰一人として文句をいう人はいなかった。それは単に「戦時中だったから」という言葉で片付けられるものではなく、自分たちの目の前にはまさに、国のため、勝つためにと炎天下の中、毎日汗を流す兵士たちがいたのである。中でも予科練生は自ら志願して飛行士となり、国のために命を懸けて戦おうとしていた幼い少年たちであったからなおさらのことだった。

終戦。その後……

終戦後「故郷へ帰ってみて敵しい食糧事情を知り、改めてお礼が言いたい」「世話になった人、優しく励ましてくれた人に礼状を出したい」と

役場などへ住所を尋ねる問い合わせが何件もあった。「任務とはいえ、水田を勝手に埋め、大勢で農家に泊まって大変迷惑をかけたので心が痛んだ」との元予科練生の手記もある。

「戦争」という事態の中でのふれ合いだったが、予科練生や兵士たちと住民の心はよくつながり、戦後も交流が続いた例が多い。また、そのような交流はないが、当時を懐かしく思い、この地を訪れる人も何人もいた。

※1 予科練生

昭和5年に横須賀航空隊に創設。15歳〜17歳の少年が一般的基礎教育の後、実地での飛行訓練を行い、短期間で実践に役立つ飛行士を育てようとしたもの。その雄姿と大空に憧れて多くの若者が志願した。当時は純粋に愛国心に燃え、進んで自ら応募する者が絶たなかった。

※2 厚板

当時使われていた厚板など本誌に掲載してあるものを含むは、一部相馬公民館で展示されている。

